

西師意の中訳日本書（再考）

舒 志 田

1. はじめに

拙稿（2000）「清末（1895–1911）における中訳日本書の一考察——西師意の場合——」（以下前稿と略す）に於いて、近代日中言語交渉史に於いて従来殆んど注目されなかった西師意という人物について、その経歴などある程度明らかにしたが、断片的な結論しか出せておらず、その著作内容についても触れなかった。そこで本稿では、その後の資料調査で得た新資料を紹介しながら、西師意の翻訳活動に焦点を絞り、その交友関係及び主な訳書の内容を考察していく。

2. 西師意の略年譜⁽¹⁾

筆者は2020年2月に西師意のご令孫西拓也氏に面会する機会を得て、家系図、日記、書信などを含めて種々貴重な資料を頂いた。またそれらの内容の公表について、学術的な使用においてご了承を得ることが出来た。ここで、氏のご好意に対し改めて御礼を申し上げる。新たに得られた知見をふまえて、改めて西師意の略年譜を示していく。

年号（西暦）	月／日／	年齢（すべて数え年）	事 項（根拠）
文久3年（1863）	11／25／	1歳	春日大社社司西師香の長男として生れる。氏人に補せられ従五位下を賜う。 (②③)
明治5年（1872）	7／4／	10歳	廃官（神社の制度変る）。(②③)
明治10年（1877）		15歳	上京、攻玉社に入る。同年慶応義塾に転ず。(②③)
明治11年（1878）		16歳	平尾録蔵に就いて漢籍を修め攻玉社に於て数学を攻め慶応義塾に於て英語を講ず。(①)
明治15年（1882）		20歳	業成りて信州諏訪に温故義塾を開く。教え子に牛山鶴堂などが居た。(③)
明治16年（1883）	2／11／	21歳	元老院議長佐野常民宛に「地方区画改正ノ件」との建白書を出す。
明治16年（1883）			信州松本に於て学塾を開く。(①)
年代不明			帰郷して奈良県庁に出仕。同年福沢の招きにより時事新報政治記者となる。 (③疑問あり)
明治18年（1885）		23歳	尾州名古屋に於て学塾を開く。(①)
明治19年（1886）	12月	24歳	「国税税法改正案」の意見書を建言。
明治23年（1890）	11／28	28歳	朝野新聞に入る。(③)
同年	9月18日		北陸政論社主筆に迎えられる。(②③疑問あり)
明治24年（1891）	2月	29歳	社内分裂の結果、第一次北陸政論廃刊(③)
同年	3月18日		北陸政論復刊(③)
同年	4月		北陸政論社主筆に迎えられる。(甲斐 [1957])
同年	12月20日		『治水論』を出版(③)
明治26年（1893）	1／4／	31歳	魚津鉄道建議草案を堀二作氏に送る。(③)
同年	1月10日		『伏木築港論』を出版。(③)

(10)

同年	2月	北陸政論社主筆を辞め、東京に引き上げる。(甲斐 [1957])
年代不明		同志社の教官となる。??
明治31年 (1898)	36歳	年初に時事新報の特派員としてマニラーに出張、同年5月帰国。(['慶應義塾學報』第三号)
明治32年 (1899)	10月	37歳 高等代数学に属する Multi-Homogeneous Theorem を著す。(①)
明治33年 (1900)	2月	38歳 高等代数学に属する Combinational combinations を著す。(①)
明治34年 (1901)		39歳 5月頃、大阪毎日新聞社北京通信員として渡清。
同年	8月	山海関より煙台に取材。
同年	11月	漢文『史眼』を著す。(①)
明治35年 (1902)	3月	40歳 漢文『実学指針』、『泰東之休戚』を著す。(①)
同年	4月	漢文『大学義疏』を著す。(①)
同年		7月頃までに、帰国。
同年	9月	慶應義塾大学予科数学教授に任ず。(①)
同年		呉汝綸と共に清に渡り山西大学に招かれ教科書編纂に当る。(③恐らく誤り)
明治36年 (1903)	6月	41歳 清国欽定山西大学訳書院東文翻訳主任に備わる。(①)
同年		七月以降上海に在り山西大学の為に左の諸書を漢文に訳す。(①) 神保氏鉱物教科書、大渡氏植物学教科書、丘氏動物学教科書、丘氏生理学教科書、横山氏地文学教科書、後藤氏物理学教科書、横山氏各科教授法正統両篇、藤沢氏算術教科書上下両篇、藤沢氏代数学教科書上下両篇、菊池氏幾何学教科書平面立体両部、馬場氏気象学、向井氏製鉄術 (計12種) ①
明治37年 (1904)		帰国 (③疑問あり)
明治38年 (1905)	7月	43歳 七月以後東京に在り左の諸稿本を漢文に訳す。飯島氏動物学講義、萩原氏電気学、小泉氏学校管理法及教授法、東野氏算数教科書、可児氏体操全書、横井氏農業汎論、沢村氏耕種原論、稲垣氏栽培通論、佐々木氏栽培各論、池田氏園芸論、八畝氏飼畜汎論、石崎氏飼畜各論、本多氏林学要論、岡島氏養蚕論 (①)
明治39年 (1906)		44歳 京都岡崎の地に私立京都中学校設立、以降教育に関する論考に従事す。(②)
同年		十一月以降大隈伯監修『開国五十年史』上下二巻の原稿を漢文に訳す。(①)
明治41年 (1908)	12/8/	46歳 自筆履歴書を作成。(①)
明治42年 (1909)	4/14/	47歳 私立京都中学校の設立者に加、校長となる。(②)
昭和4年 (1919)		京都婦人新聞発行 (②)
昭和11年 (1936)	9/26/	74歳 卒去 (②③)

この略年譜で、前稿で空白となっただけの時期における西師意の経歴がより明確に成ってきた。

まず、明治10年(1876)15歳の時に上京して攻玉社に於て数学を攻め、同年慶應義塾に転じ、翌年(1878)に平尾録蔵(じゅうぞう)に就いて漢籍を修めたのである。

平尾録蔵は美濃国岩村(現在の岐阜県恵那市岩村)藩士で、かの有名な下田歌子(1854-1936)の父である。「尊皇家であり、また謹厳実直で一途な性格のため、藩内の内紛に巻き込まれ、安政5年(1858)遠慮謹慎を命じられた。元治元年(1864)に謹慎が解かれた録蔵は、幕末維新の動乱期にあって、藩のため、朝廷帰順に奔走する。しかし慶応4年(1868)5月、理由不明のまま、再び隠居謹慎を命じられるが、明治3年(1870)に明治政府より神祇官の宣教使史生として召し出され、東京に出府したのである」⁽²⁾。

西師意はどういうついでで平尾録蔵に師事したのだろうか。あるいはその叔母の西子の関係であろうか。西子が明治天皇の女官であるため、下田歌子と親交があってもおかしくないという。

また、父が下田歌子のもとで書生をしたことがあると聞きましたが、彼女は実践女学校の創設者でありそのもとに革命家秋きん女史も学びました。彼女は女官をしていたこともあり西子さんとの親交があってもおかしくありません。⁽³⁾

下田歌子が明治五年（1872）に女官に抜擢され宮中へ出仕し、明治12年（1879）に剣客の下田猛雄と結婚して宮中出仕を辞することになる。明治11年の時、下田歌子が24歳で、西師意より9歳年上になる。彼女が父の変わりに西師意に漢文を教えたことは考えられなくもない。

3. 西師意の翻訳活動

3.1. 華北訳書局との関係

前稿で考察した通り、『官民衝突之急調』（1903年出版）の奥付に掲載された金城叢書の広告文から、西師意が華北訳書局に関わっていたことは分かる。

西先生大阪毎日新聞の為に筆を載せて清国に遊び業務の傍ら兼ねて華北訳書局の事に従ひ書を著すこと数種

彼は1901年5月から1902年の間に、大阪毎日新聞社の北京通信員として滞在中、呉汝綸らとも付き合い、四種の漢文書籍（金城叢書）を著していた。その間、華北訳書局の翻訳事業にも手助けしたことがある。

華北訳書局は1901年、清末の大儒呉汝綸が弟子の常培璋、鄧毓怡に命じて営ませた訳書機構であり、最初は新聞社（報館）であったが、まもなく清政府に取締をされて、華北訳書局と改名して雑誌を刊行するようになった。『経済叢編』を発行し、幾つかの訳書も出版した。

常培璋（1869-?）は、字は済生、稷筮、号は寄斎、河北衡水饒陽の人である。光緒20年の貢生で、後に兵部郎中となる。呉汝綸が蓮池書院の山長になった間に弟子入りして古文などを学ぶ。弟子の中でも特に才能が優れており、晩年の呉汝綸に信頼されていた。光緒28年（1902）2月25日に『経済叢編』の創刊後、主筆となった。呉汝綸の歿後も、華北訳書局の運営に尽力していた。中華民国が成立した後、1913年4月に民国衆議院議員にもなり、没年は不詳である。『寄公雜録』『寄斎詩刺』『寄斎文章』『寄斎詩鈔』などの詩文集や、『初等小学中国地理教科書』（衡水劉乃晟との合編）を著した。⁽⁴⁾

鄧毓怡（1880-1929年）は、河北省大城県白洋橋の人、字は和甫、また任斋、号は拙园である。幼少にして詩文に長け、友人梁建章の紹介で蓮池書院に入り呉汝綸に師事し漢文を修めながら、英語と日本語もマスターしたという。1900年の義和団事件で一旦学業を中断せざるを得なかったが、翌年師命を受けて常培璋とともに華北訳書局の編集者となった。1903年日本に渡り早稲田大学に留学し、一年後に帰国した後、兄の鄧毓悒と一緒に故郷で新式の学校啓智学堂及び自強女子学堂を開き、国文、英語、算数、地理、歴史、修身、格地（自然知識と動物、植物、鉱物及び理化学など初級知識）などの課程を設け、啓蒙教育に力を入れていた。学校で使った教材は殆んど、鄧毓怡ともう一人の日本留学生王世琛が日本の小中学校の教科書から翻訳したものである。1911年の辛亥革命の後、鄧毓怡は有志らと一緒に国民協進会を立ち上げ、後に共和党と改組して直隸支部の幹事長となり、衆議院議員にもなった。1914年に国会が袁世凱によって解散されてから、張紹曾の招きで綏遠に行き、綏遠銀行を創設して頭取となった。1929年3月11日に病気のため北

(12)

京で卒去した。⁽⁵⁾ 田雁 (2005) には、鄧毓怡が訳した『鉱物界教科書』(脇水鉄五郎著、河北訳書社、1907年、32開、88ページ) が収録されている。

前稿で考察した通り、呉汝綸は西師意の漢文著書に序文を寄せたり論評を下したりした。特に西師意の訳した日英同盟について留意し、その内容を日記にも書き留めていたほどである。二人が知り合っていたことは疑いない。

西師意為訳英日同盟約八条、其文云、英日两国政府因同願維持泰東現今情勢、為其大局安全起見、維持清韓两国自主、保其疆域完全、並該两国国内有関各他国商工等務、亦於該两国共取平等權利。所定各条列後。(以下略)

壬寅正月六日⁽⁶⁾ (筆者注：1902年)

当時、蓮池書院の山長である呉汝綸はその学問や見識の高さなどで、国内の人々だけでなく清国滞在または来訪の日本知識人や官僚たちにも広く慕われており、みな競って彼の門を訪ねていたのである。

前稿で考察したとおり、西師意は遅くとも1901年5月頃、大阪毎日新聞北京通信員として清国に渡っている。

○西師意氏 久しく時事新報編輯局に勤務せられし氏はこの程大阪毎日新聞北京通信員に転勤せりと

(明治34年5月9日発行『慶應義塾學報』第四十号の「動静」欄)

その頃、呉汝綸は北京東文学堂の存続と報館(新聞社)開設のために奔走していた。たとえば、嚴復や李鴻章宛の手紙からその一斑が伺える。

答嚴幾道(辛丑年)四月十八日

原富大稿委令作序、不敢以不文辭、但下走老朽健忘、所讀各冊已不能省記。〈中略〉廉郎(筆者注：廉惠卿のこと)所以仰煩者、固在報館主筆、尤欲得大才訳英美要刪奇書、以為有一事足以維持報館。台端所訳又可压倒東亞。其以如此、能否俯就、專望見教。茲附去報館章程、乞是正幸甚。⁽⁷⁾

上李相(辛丑年)八月二十四

謁辭時鈞誨殷殷垂詢学社報館二事、深知某恋悉都下、專以此二事關係甚大、欲觀厥成。今東文学社生徒二百余人、可謂極盛大。每月僅恃飭撥塩務之百金、万不敷用。〈中略〉報館前瀕行時、代上呈詞請批示立案。其外部一呈即面交徐進齋侍郎、值蓋躬違和、久未裁批。而外部呈詞伝聞飭令緩弁。欲求鼎力成全、或於慶邸處一言解脫、無任私望。不具。⁽⁸⁾

ところで、新聞社開設に関して、呉汝綸は最初、日本人の大和氏との合弁で設立しようと考えていた。しかし、大和自身には資本金なく上田という人に頼んで日本に戻って印刷機を購入させるが、上田は誰にも相談せず勝手に中西という人に印刷機の手配をさせ、大和越しに中西を合弁

パートナーにしてもらおうと、呉汝綸側に要求してきた。何月もかけて話し合ってきた大和には肝心の資本金がないためパートナーとしては無理がある。かといって、今まで面識のない中西にはすぐパートナーとしては決めがたい。そこで、西師意が登場したのである。呉汝綸が辛丑年六月十四日（西暦1901年7月29日）に、郭子余、賀墨儕、張楚航それぞれ宛てに出した手紙にこのことが記されている。⁽⁹⁾



（紙幅のため、郭子余宛て手紙のみ、全文を上記に掲載す。）

与郭子余書

〈前略〉因執定不与中西合弁、擬自購印機、而別用日本人西師意為夥友。此人學問性情皆比大和中西為高、不至与我爭權。

（日本語訳：よって、中西とは合弁せず、こちら独自で印刷機を購入して、新たに日本人の西師意を協力の相手とすることに心決めた。彼は学問及び性情がともに大和、中西より優れており、我等と権利を争うこともないはずである。）

与賀墨儕書

現擬自購機器、不与日本人合股、但延一日本人西師意入為夥友、然不集日本股分。如此則權利均自我操、無反客為主之患。

（日本語訳：いま思うには、別途印刷機を購入して日本人とは合弁せず、ただ日本人の西師意を招いて協力の相手とするが日本側の出資は要らない。そうすれば権利はすべて我々によってコントロールされて、主客が転倒する心配もなくなる。）

与張楚航書

股本雖無倭人、館内仍請日本名手西師意幫助通訳訪事諸職、取外人之利而去其弊、似為善也。不具。

（日本語訳：出資者には日本人がいないが、社内には日本人ベテランの西師意を招いて翻訳や取材などの職務を手助けしてもらおう。外国人の長所を得ながらその弊害を避ける。いいではないか。敬具）

上記を見ると、西師意は北京に渡ってからまもなく呉汝綸と知り合い、その学問と品格が呉氏に評価され「夥友」に選んでもらったのである。西師意はそれまで朝野新聞、北陸政論、時事新報、大阪毎日新聞などの記者や主筆としての経験あり、漢文にも精通しているので、呉汝綸にとっては紛れなくも適した人選である。

(14)

しかし、新聞社開設の許可がなかなか下りてこないため、吳汝綸は辛丑年（1901）九月十三日に直接、徐進齋侍郎に書信を送り、許可を懇願していた。

某等議開報館業已旬月、東西各国報紙久已喧伝、外国人相見無不佩比此举之善而勸其速成。今若被外部阻止、必且貽笑強隣、以此 X 吾国之不能興革。此雖小事、似亦有関大局。仍求我公緩頰、言之邸相二公、俾得及時開弁、不令社衆解体、実為至幸。⁽¹⁰⁾

それでも、万一不発に備え、無駄な時間を過ごさないように、同日に弟子の常済生、鄧和甫、楊儒珍の三人宛てに手紙を出して西師意に「報律」（新聞に関する法規）を訳してもらい、徐進齋に提出するよう指示しながら、許可されるまでの時間を利用して西師意に西学関係の書物を翻訳させて、新聞紙の掲載内容として準備をしておくように心がけていた。

常済生鄧和甫楊儒珍三君（辛丑）九月十三日

初十日李季高公子來函謂慶邸意俟 回鑾後奏定報律再飭拳弁、是以論批從緩云々。外部欲定報律正不知何時。鄙意欲求公等向西師意覓求報律、訳交徐侍郎求其俟 回鑾後即行速奏為要。報館未開、諸君已支薪水火食、各股東皆不願意。不如乘此暇時、請王隣閣、西師意諸人將応訳之西学、先行訳稿、公等刪潤成文、繕写清本。此外則擬作多篇議事之文、予備開弁之用。則現今局費不為素餐。若袖手安座、遊談送日、恐非各股東願聞也。⁽¹¹⁾

上記の諸資料に示された如く、西師意は吳汝綸の新聞事業に参加するようになり、訳書局になってからも引き続き尽力していた。彼は明治35年（1902）1月26日に、思いを寄せた「壺岐子」という女性に宛てた手紙の中で次のように述べたことがある。

小生は近日瑠璃廠沙土園華北訳書局へ移転する筈にて昨今転居の準備も略ぼ整ひ申し候次便よりの御音信は必ず右の局名に宛てて御差立なされたく一寸御知らせ申置候⁽¹²⁾

そして、吳汝綸の東文学社にも非常勤講師として講義をしたことがある。同3月10日の手紙に、「昨今東文学社の囑託を承けて学生に代数の講義を聞かせ居り候」とある。

なぜ、西師意は吳汝綸の華北訳書局などの事業に尽力したのか？ 詳しくは後日の彼の対中思想などの研究に期するが、ここでは簡単に触れておく。彼は『泰東之休戚——日英同盟解』（1902年）の巻頭において、自分が日本人の身分を忘れて、全く中国人の立場に立って論説していると表明したことがある。

著者、説述此篇、自忘其為日本人也、置身於清人之地而立説也。此篇、非以日人之心以述之、恰似清人之著矣。読者、宜以此意觀之。

つまり、一種の同文同種による「清国同情論」が看取できる。もちろん、西師意には若干「私心」もあったようである。1902年2月25日に「壺岐子」宛に出した手紙の中で、彼は次のように述べている。

訳書局は行く行く助け呉れとの希望にて強いて小生の同住を要求いたし候に付取敢へず転居したる次第に御座候

御身を懐ふ毎に心は馳せて日本の空に彷彿ひ申し候へば一つには東京の留守宅、万事意の如くならず今日帰朝いたし候ては未だ御身を小生所望の健良なる位地に立たしむるの容易ならざると又二つには今少し清国官民の間に小生自身の地盤を固め多年の便路を開き置かんの希望あるとに依り今直に愛情の動くがままを行ふも如何にやと窃に惑ひ申し候

それから三、四ヶ月後に（遅くとも7月頃）西師意は帰国し東京に戻り、同年9月頃慶応義塾の数学教授となったが、北京滞在中の一年間で、彼が呉汝綸とかなり親しくなったと推察できる。また、私交に於いても呉汝綸は西師意を一人の話し相手とし、日本遊学中の息子呉啓蓀のことを気にかけていることを打ち明けたりしたほどである。辛丑（1901）年八月二十二日に息子宛ての手紙において、西師意の言い伝えによって息子がその心配ぶりを知り、親が懐かしくなったという日記を見た呉汝綸は、息子にそれが西師意の妄言妄聴にすぎないといい、遊学に安心してくれと諭したのである。

汝所寄牛肉汁、吾毎日服二次、此是達汝之意耳。〈中略〉汝日記中、因西師意言我思汝、遂起思親之念。西師意實妄言、吾素不為兒女子態。汝年少正当遠遊以自壯、可常依父母。為凡兒丈夫、必以高掌遠 為貴。恋家非俊傑所為也。

呉氏は京師大学堂総教習の肩書で、日本教育制度及び実情を視察する為の訪日中において、西師意の自宅に行ったことがある。

至西師意宅作字、皆宮人所求者。西師意之伯母在宮教習、故展転索書者甚多也 十九日（筆者注：旧暦1902年6月19日、西暦7月23日）⁽¹³⁾

筆者が調べた限り、呉氏が訪日中に、公式の宴会や政府要人の招き以外に、高名とはいえない一民間人の私邸に訪問したのは、西師意の場合のみである。

3.2. 山西大学堂訳書院における翻訳活動

前稿では、『慶応義塾学報』第六十九号（1903年9月）の「動静」欄に掲載された下記の記事を発見し、西師意が中国上海に渡り日本語教科書の漢訳に従事し、そのきっかけは呉汝綸一行の訪日であろうと推定していた。

○西師意氏は義塾普通部教師を辞せしが近日渡清の上支那時文翻訳事業（日本及泰西の教科書を支那時文に翻訳する事）に従事するよし

西伊策氏私信において、下記のような記述がある。

呉汝綸については京子叔母からその名を聞いていましたが清末の有名な文学者でありまた教育者でもありました。曾國藩に重用され（李鴻章にも）その後弾劾によって失脚しました。京師大学堂総教習として日本の教育を視察する為来日、下田歌子を訪れ、日本人の学者をつ

(16)

れて帰国したとあります。⁽¹⁴⁾

但し、西師意の自筆履歴書によると、彼は1903年6月に「清国欽定山西大学訳書院東文翻訳主任に備わる」ことになり、同年7月以降上海に在り山西大学の為に諸書を漢文に訳していた。呉汝綸の一行が帰国したのは1902年10月22日であることから⁽¹⁵⁾、その時に西師意をつれて帰ると言うことは考えられない。

呉汝綸は、日本視察から戻ってからも京師大学堂の総教習を辞して故郷の桐城に帰り、新式教育制度の下での啓蒙教育を実行しようと最後の力を絞った。彼はもはや清政府の権力者や官僚たちの無能さや制度の積弊などを見抜き、また、表面的では盛大な歓迎をしてくれたものの本心的には強硬的で野心を持っている日本をも見抜いたのである。1903年旧正月の6日に未遂の教育事業を残しながら他界した。西師意にとっては福沢諭吉に続き、またも一人の「恩師」とも言える人を亡くしたことになる。そして、ようやく手にした慶応義塾教授の座を放棄してまで、山西大学堂訳書院の一員になり、その教科書の編訳に携わるようになるのも、もしかしたら呉汝綸の未遂事業に少しでも力を貸してあげたいという彼の気持ちがあったのかもしれない。

但し、西師意が山西大学堂訳書院を選んだ経緯は不明である。一説ではティモシー・リチャードの招聘によるものと言われている。ティモシー・リチャードがその回想録の中で、彼自身が1903年5月に日本に赴き、山西大学堂のために教材を探し、日本人及び中国人を招いてその翻訳に従事させようとしていた、と述べている。

In May 1903 I paid a short visit to Japan for the purpose of securing suitable textbooks for the Shansi University, and to engage a Japanese and Chinese scholar for their translation. (pp318-319)⁽¹⁶⁾

前記年譜によれば、西師意は山西大学堂訳書院に二年間ほど在籍していた（1903年7月－1905年7月）。しかし、彼の上海生活に関する資料はまだ把握できていないため、ここでまず彼の同僚について若干考察しておく。

山西大学堂訳書院には、英語、日本語の翻訳者及び校閲者は前後、あわせて10人余り在籍していた。夏曾祐（浙江錢塘）、許家惺（浙江上虞）、朱葆琛（山東高密）ら、当時の翻訳業界の俊材を含め、張在新（上海）、范熙沢（上海）、黄鼎（福建同安）、梁瀾勳（広東三水）、許家慶（浙江上虞）、葉青（上海呉県）、郭鳳翰（山東省）、蘇本銚（上海）などが居た。西師意もその中の一員であった。⁽¹⁷⁾

この中で最も有名な人物は、後に北京図書館（後の中国国家図書館）の館長を務めた夏曾祐（1863－1924）であろう。字は穂卿、号は別士または碎仏。浙江錢塘（杭州）の人で、清朝光緒十六年（1890年）に進士となった。梁啓超・譚嗣同・嚴復らと親しく、維新活動に積極的であった。戊戌変法の失敗後は安徽省祁門県の知事（1899－1902）となり、母親の死去に際して喪に服するため、上海に寓居（1903－1905）、その間、『中外日報』の主筆となり、中国歴史の名著の『最新中学中国歴史教科書』（後に『中国古代史』と改名）を著した。1906年3月から5月の二ヶ月間、清政府の五大臣に随行して日本を訪れ、憲政について視察して『憲政初綱』を編纂した。辛亥革命後は北洋政府教育部の社会教育に携わる部門の長や北京図書館館長を歴任、1924年北京で逝去した。⁽¹⁸⁾

上記の経歴から見ると、夏曾佑の山西大学堂訳書院の仕事は恐らく兼職の形で従事したと思われる。光緒29年（1903）旧暦9月21日と22日の日記（楊琥編纂の『夏曾佑集』に所収）に、

二十一日 晴。与菊生（筆者傍注：張元済のこと）訪李提摩太。下午張硯孫来。

二十二日 晴。巳刻、李提摩太携来訳稿一冊。午刻、宋承之来。下午、与浩吾（筆者傍注：『新爾雅』著者の一人である葉瀾のこと）至市上一遊。晚菊生来、即去。与仲騫、浩吾、清漪夜談。⁽¹⁹⁾

とある。また、同十月初三日、初六日にも「訪李提摩太」と記してあることから察すると、彼はティモシー・リチャードの要請で山西大学堂訳書院の訳書事業を手助けしたのだろう。

但し、上海寓居の間に、織田得能（旧暦1902年5月29日）、内藤虎次郎（同1902年12月3日）、佐々木医師（同1904年4月20、23日、11月27日、12月5日）、豊島寛和尚（同1904年12月1日）、僧侶伊藤賢道（同1905年2月9日杭州）、松岡洋右、堀扶桑（同1905年6月29日）などの日本人との交遊があるが、西師意との接点はこの間の日記を見た限り、なかったようである。

許家惺（1873-1925）は、浙江上虞人で字警叔、号黙斋、別号東雷である。代々読書人の家柄で幼少にして詩文に長けたという。光緒庚子辛丑（1900、1901）の併科举人であり、日清戦争（1894）の後、杭州で群学輯訳社を設立。1896年に『時務報』の創刊者の汪康年の招きに応じて編集者になり、後に、『中外日報』（1898）の主筆と成る。また、広学会の仕事にも従事して、その関係でティモシー・リチャードから声を掛けられ、山西大学堂訳書院の翻訳者の一員になったと思われる。彼の詩集『許東雷詞存』には、1907年頃ティモシー・リチャードのお供をして北京に行ったとき詠まれた詩が一首残っている。

憂時熱淚似長沙、四十年来客漢家、烈士未忘彈鋏志、一年一度上京華

【作者自注】李提摩太君為余教导、近以条陳国計学務来京、邀余偕行以助書記、其人頗熱心、年已六十三、猶有壯心也。

西師意の訳した教科書に許家惺が関わったものとして、『鉱物教科書』（1905年、校正）、『丘氏生理学教科書』（共訳）、『動物学教科書』（共訳?）、がある。このほか、田雁（2015）では、許家惺の手による下記二種の漢訳日本書が掲載されている。

※『動物学』（一卷）（日）大渡忠太郎著；許家惺訳；（太原 山西大学堂訳書院、1911年前？）田雁1461

※『鉱物学』（一卷）（日）神保小虎；（日）西師意 合著；許家惺訳（太原 山西大学堂訳書院、1911年前？）田雁1557

筆者は当該書物を目にするのではないため断定はできないが、あるいは西師意識の『動物教科書』と『鉱物教科書』から編纂したものだろうか。

朱葆琛は山東膠州高密県の人で、字は猷廷。光緒14年（1888）年の登州文会館の卒業生で、同館の教習となり（『登郡文会館要覧』上海美華書館、1891年印刷）、後に北京汇文書院教習、清江浦官学堂教習、京師大学堂教習、狄考文（Calvin Wilson Mateer, 1836-1908）の助手、山西大学堂訳書院主筆、青島禮賢書院教習、天津北洋訳書館教習などを歴任した⁽²⁰⁾。宋景清、陆之安、冯文修、李天相らと一緒に山西大学堂に招聘され、当時の翻訳界の俊材と言われていた。訳書には『声学揭要』（赫士 Watson Mcmillen Hayes 口訳、朱葆琛筆述、上海美華書館印、1898年）、『光学

(18)

掲要』(同)などがある。肖朗、呉濤(2014)では、「『物理学教科書』(著者不詳、[日]西师意、朱葆琛訳述)」としている。

許家慶は浙江上虞人であり、前記の許家惺の兄弟の可能性もある。後に、『東方雑誌』の日本語文献の重要な訳者の一人となり、杜亜泉が主筆になってからの1911年5月の第8巻第3号から、1917年1月の第14巻第1号まで多くの訳文を投稿していた。⁽²¹⁾

彼の手になる漢訳日本語には、『新撰動物学教科書』(五島清太郎著、許家慶・凌昌煥訳、上海商務印書館、1908年)、『動物学新論』(箕作佳吉著、許家慶・杜新田訳、上海商務印書館、1909年)などがある。『動物学新論』は後に、杜亜泉が校訂を加え、『動物新論』と改名して上海商務印書館より刊行された(1910年9月初版、1913年3月3版、図版あり、270ページ)。

郭鳳翰は字が西園、山東登州府黄県郭家村の人である。朱宝琛と同じく登州文会館の生徒であったが中退して卒業できていない。後に煙台の米国領事館の通訳となり、山東高等学堂の教習となった⁽²²⁾。山西大学の「校史專輯四：中斋 西斋 訳書院」によると、彼は山西大学堂の教員でもあり、工学を教えていたという⁽²³⁾。

梁瀾勛(1880-?)は広東三水の人である。香港皇仁書院の卒業生で、山西大学堂訳書院の英文翻訳、天津北洋大学教員、粵漢鉄路の文案、兩広総督署北海洋務局洋務委員などを経て、1908年5月-1910年11月に初代の清政府駐澳洲総領事となっていた。⁽²⁴⁾

蘇本銚(1874~1948)、字は頴傑、福建汀州の人。18歳のとき、「院試」(清末科挙制度の地方試験)に合格し貢生となり、同年聖約翰書院に入学し英文などを学び卒業した後、上海英国ロイヤル弁護士事務所や山西大学堂訳書院の英文翻訳となった。光緒29年(1903)に兄弟の蘇本立、蘇本炎、蘇本浩らと一緒に上海民立中学校を創設者し初代校長に就任した。以降、40年ほど教育に従事していた。『共和国国民英文読本』(商務印書館出版)などを編纂した。

黄鼎(1873-1919)、本籍は福建省同安(今のアモイ)の人、字は佐廷。民国6年(1917)到北京清華学校編『遊美同学録』によると、彼は上海の生まれ、当時42歳で既婚、子供が7人(男2女5)ある。聖約翰大学(St. John's University)を卒業してから光緒18年(1892)に米国へ留学(University of Virginia)、英文名はTheodore Ting Wong (T. T. Wong)、1896年に卒業した。翌年帰国し、聖約翰大学の教員となり、1901年4月に山西大学堂訳書院の翻訳となった。その後1904年米国駐上海総領事館の通訳などを歴任した。1905年頃から顔惠慶の『華英字典』の編纂にも協力した。1911年に米国遊学監督となり、ワシントンに常駐したが1919年1月29日に同僚の2人とともに仕事場で何者かに銃殺された。探偵小説Holmesを最初に「福爾摩司」と訳した翻訳者とされている。⁽²⁵⁾

張在新は上海の人、字は惕銘。光緒23年(1897)に南洋公学にした学生の一人であったらしい⁽²⁶⁾。1901年頃、黄鼎と協力して福尔摩斯探偵小説シリーズを翻訳していた。⁽²⁷⁾

葉青は西洋学問に熱中し特に天文学に詳しい。経心書院で天文学の教習をした経験もあり、『申報』に多数の西洋知識に関する文章を寄稿した。『普通天文学教科書』『天算常識』『開正立方奇表』

などの書物を著した。⁽²⁸⁾

范熙沢(上海)についての資料は少ないが、かつて北洋大学堂の漢文教習であったようである。

以上、西師意の同僚たち(一部は兼職)の経歴を一通り考察してきたが、いずれも彼と交遊関係にあることを示す文献資料は見当たらなかった。

3.3. 東亜公司との関わり

西師意の自筆履歴書によれば、彼は明治38年「七月以後東京に在り左の諸稿本を漢文に訳す」(前記略年譜を参照)ことになる。その訳書は全て東亜公司から出版されたことから、同社と何らかの関わりがあったと思われる。

西師意識『最新算術教科書』(1906年11月刊行)の原著者東野十治郎の序文には「今先脱算術之稿。請西氏。訳之漢文。遂使東亜公司刊布。」(今まず算術の稿本を書き終えた。西氏に漢文に翻訳してもらい、東亜公司に刊行させた)という記述があるが、これを見る限り、西師意は東亜公司専属の翻訳者ではないようである。東野十治郎は当時、嘉納治五郎の嘱託を受けて、学習院教授を辞めて、1904年10月に宏文学院の数学教授となり⁽²⁹⁾、清国学生(留学を含めて)のために数学関係の教科書を編集したのであり、その翻訳を西師意に依頼したわけである。

4. 訳書の内容

以下、西師意の手になる漢訳日本教科書を見ていこう。前稿では彼の著作一覧表を掲げたのであるが、ここでは、その漢文による著書または訳書のみ再掲する【付録】。

訳書内容については今回、紙幅のため、『鉱物教科書』(1905年)一例を見ることに留めておく。

本書の表紙には中国語の縦書きで「日本 神保小虎原著／西師意識述 翻印必究」、「鉱物教科書」「光緒帝乙巳年七月 山西大学堂訳書院訳印」と記している。内題は英文による書名などで、表紙の内容以外に、「Edited by J.DARROCH」を付け加えている。奥付には「光緒三十一年七月／発行所 大清国上海西華徳路 山西大学訳書院／印刷所 大日本国東京市日本橋区本町三丁目 博文館」とある。

内容は、目録(一～三ページ)／本文(一～七十六ページ)／鉱物学語表(中英対照、七十七～八十ページ)といった構成である。

原著者の神保小虎(じんぼう ことら、1867-1924)は明治-大正時代の地質鉱物学者で、慶応3年5月17日に江戸で生まれた。北海道庁技師となり、ベルリン大に留学。明治29年母校帝国大学の教授となる。北海道、樺太(からふと)、ロシアのウラジオストク地方などの地質・地理調査をおこなった。大正13年1月18日に58歳で死去している。⁽³⁰⁾

神保小虎が1905年以前に著した同類の書物は下記のようなものがある。

- ①『新撰鉱物学教科書』(1897、富山房)
- ②『鉱物学教程』(1898、金港堂)
- ③『鉱物界教科書：普通教育』(1902、開成館)

内容や構成的には、③番の『鉱物界教科書：普通教育』が一番近いが、章立てや内容的には完全一致していないところから察すると、西師意が訳述するにあたり、自分なりに加筆や内容編纂したと見える。朱京偉(2002)の論文において、西師意識述の『植物学教科書』にも同じ傾向が指摘されている。

本書の巻末に158語をリストアップした中英対照の「鉱物学語表」がある。参考のため付録として掲げておく。順番は英語のアルファベット順に直した。現代語訳は筆者による。当時の新語であろうと思われる語には※印をつけた。おおざっぱに見ると、158鉱物用語のうち、既存の在来語は21.5% (表では○と示した)、在来語の置き換えは23.4% (同△)、新語は55.1%、という割合になっている。置き換え語と新語のうち、合わせて65語は現代語で日中が一致しており (字体などは無視する)、全体の41%を示している。このうち、中国洋学書から日本に入り、中訳日本書を通して中国に逆輸入されたものもあると思われる。

それ以外に、『鉱物教科書』の本文に出た語彙として次のようなものがある。

阿非利加 安的摩尼 安山岩 澳州 半透明 貝殻 比重 玻璃板 玻璃盃
 箔金 層色 磁器 地変 地殻 地勢変遷 電気 電線 彫刻 動物 動植物
 断層 噸 俄羅斯 二十四金 髮晶 非金属鉱物 非晶体 非生物 非洲
 分泌 分析 風化 腐敗 腐蝕 工業 公率 功用 固体 関繫 光沢 貴金属
 寒暖計 合金 合衆国 黒晶 黒鉛 黒曜石 厚生 花崗岩 化学 混合
 活版印刷 活字 火山灰 火薬 貨幣 機械 集合体 堅度 建築 角度
 結晶体 金属 金属鉱物 空気 鉱脈 鉱物 鉱物界 理化学 利用 六角柱
 美洲 密接 模範 摩擦 尼刻爾 凝灰岩 凝体 漂白 漂白料 品類 平面
 葡萄 棲息 気燈 気体 汽車 汽船 器具 器械油 鉛筆 侵蝕 晴雨表
 燃料 染料 人類 融解 砂金 殺菌 沈澱 生存界 生物 生物体
 十八金 十四金 石版印刷 石材 石墨 石油発動機 食料 世界市場
 輸出 輸入 樹脂 素質 炭層 陶磁 淘汰 特色 天然 透明 塗料 胃液
 文化 文具 文明 無色 物質 洗濯 顕微鏡 肖像 消毒 消毒剤 消化
 性質 玄武岩 循環 延性 研究 顔料 洋燈 液体 飲料 印章材 御影石
 原料 原油 展性 蒸気 蒸気 植物 智識 製革 製紙 緻密 種類 重率
 重油 装飾品 資本 自然界 縦面

上記中、たとえば、「燃料」「肥料」「気体」「固体」「液体」「結晶体」「重油」などはいずれも当時の新語であろうと思われる。

但し、個々の語についての語誌的な考察は今後の課題としたい。なお、鉱物学に関する翻訳書として、以下のものがあるが、各書における訳語間の継承・影響関係などについても今後の課題とする。

年代	書名	著者	訳者	出版社
1903	鉱物学問答	日本富山房編	范迪吉等訳	上海会文学社
1903	鉱物学新書	日本富山房編	范迪吉等訳	上海会文学社
1903	新式鉱物学 (六卷)	脇水鉄五郎著	鐘観 訳	上海啓文訳社
1905	鉱物学簡易教科書 (二卷)	巖田敏雄講義	余肇昇等編	湖北学務処 師範教科叢編
1905	鉱物学教科書	神保小虎著	西師意訳述、許家惺校正、山西大学訳書院	
1906	鉱物 (江蘇師範講義第14編)	鈴木亀寿講授	江蘇師範生編輯	南京江蘇寧属学務処
1907	鉱物界教科書	脇水鉄五郎著	鄧毓怡訳	河北訳書社
1907	普通化学教科書 (附鉱物)	原田氏、藤堂氏合編	錢承駒訳	上海文明書局
1907	中等教育化学鉱物教科書	濱幸次郎、河野齡蔵著	唐士傑訳述	上海普及書局
1907	中学鉱物教科書	石川成章著	董瑞椿訳	上海文明書局

- 1907 最新初等化学鉱務教科書 濱幸次郎、河野齡蔵著 華文訳 上海文明書局
 1911前 鉱物学簡易教科書(二卷) 横山又次郎著 范延榮訳 北京直隶学務処石印
 1911前 鉱物学(一卷) 神保小虎、西師意合著 許家惺訳 山西大学堂訳書院
 1911前 鉱学簡明初級教科書(一卷) 江吉治平編著 梁復生訳 上海導欧訳社石印本
 1911前 理科教本化学鉱物編(三卷附化学原質異同表一卷) 桜井寅之助編 楊国璋訳陳石麟編附表 上海進化
 訳社
 1911前 中学鉱物教科書 山田邦彦、石上孫三合著 陳鐘年訳 天津北洋官報局
 年代不明 日本鉱律 唐宝鏐訳 訳書汇编

【付録】 西師意の中訳日本語リスト

【付録】 鉱物学語表

付録：鉱物学語表(現代語訳は筆者による)

	訳語	英語	現代中国語	現代日本語	別名	字典集成1868	
△	陽起石	Actinolite	阳起石	陽起石	アクチノ閃石, 緑閃	—	1
○	瑪瑙	Agate	玛瑙	瑪瑙		瑪瑙石	
△	送氣機	Air pump	气泵; 抽气机; 空压	空気ポンプ		抽風之器	
○	明礬	Alum	明矾	明礬		白礬	
※	鋁	Aluminum	铝	アルミニウム		—	
※	阿麻爾含	Amalgam	汞合金	汞和金(こうわきん)	アマルガム	—	
○	琥珀	Amber	琥珀	琥珀		琥珀	
△	紫晶	Amethyst	紫晶	紫水晶	アメシスト	藍寶石, 紫玉礪	
※	角閃石	Amphibole	角閃石	角閃石		—	1
※	阿尼林	Aniline	苯胺; 阿尼林	アニリン		—	
※	無煙炭	Anthracite	无烟煤	無煙炭		—	
※	銻	Antimony	銻	アンチモン		—	
※	磷灰石	Apatite	磷灰石	磷灰石	アパタイト	—	1
※	水成岩	Aqueous	沉积岩; 水成岩	水成岩		—	1
※	輝銀鋳	Argentite	輝銀矿	輝銀鋳		—	
※	艦甲	Armour plate	装甲板	装甲板		—	
△	石綿	Asbestos	石綿	石綿	アスベスト	不灰木, 陽起石	1
※	輝石	Augite	輝石	輝石	pyroxene	—	1
※	黒炭	Black coal	黒煤	黒炭		—	
△	吹管	Blow pipe	通风管; 吹管	吹管	ブローパイプ	吹筒	1
※	噴井	Blower	风箱; 鼓风机			—	
※	塊状岩	Boulder	巨砾; 漂砾	丸石、玉石	ボルダー	—	
△	真鍮	Brass	黄铜	真鍮		青銅, 生銅	
○	青銅	Bronze	青铜; 銅錫合金	青銅	ブロンズ	黄銅, 古銅色	
※	方解石	Calespar	方解石	方解石		—	1
※	石炭酸	Carbolic acid	石炭酸	石炭酸		—	1
※	炭酸蘇打	Carbonate of Soda	碳酸苏打; 汽水	炭酸ソーダ		—	
※	炭酸	Carbonic acid	碳酸	炭酸		—	1
△	鑄鉄	Cast iron	鑄鉄	鑄鉄		生鉄	1
△	塞門德	Cement	水泥	セメント		石灰, 膠粘	
※	玉髓	Chalcedony	玉髓	玉髓	カルセドニー	—	1
※	黄銅鋳	Chaleophyrite	黄銅矿	黄銅鋳		—	1
※	緑泥石	Chlorite	緑泥石	緑泥石	クロライト	—	1
○	辰砂鋳	Cinnabar	辰砂	辰砂	シナバー	珠砂, 辰砂	
※	黄晶	Citrine	黄晶	黄水晶	シトリン	—	
△	粘土	Clay	粘土	粘土		壤, 黄泥, 泥	1
※	粘板岩	Clay slate	板岩, 黏板岩; 頁岩	粘板岩		—	1
※	裂率	Cleavage	劈开; 分裂; 卵裂	劈開		—	1
※	含草晶	Closed-acicular quartz	针状石英	針状石英		—	
△	石炭	Coal	煤炭	石炭		煤, 石煤炭	

※ 他爾液	Coal tar	煤焦油；沥青油	コールタール		—	
△ 骸炭	Coke	焦炭	コークス		炭，半焼之炭	
※ 康克利德	Concrete	混凝土	コンクリート		凝結成塊，結実	
△ 孕子石	Conglomerate	聚集体；集成物；混合体；砾岩；	集塊状	コングロマリット	蛮石	
△ 鋼玉	Corundum	刚玉；红宝石	鋼玉	コランダム	Corundum stone 玉石，宝石	
※ 結晶	Crystal	结晶	結晶		水晶（筆者注：名詞）	1
○ 钻石	Diamond	钻石	ダイヤモンド		金剛石，钻石	
※ 舍利塩	Epsom salt	泻利盐；七水镁矾	舍利塩	エプソン塩	—	
○ 木賊	Equisetum	木賊	木賊	とくさ	接統草，木賊	
△ 爆薬	Explosive	炸药，火药	爆薬		※火薬	
※ 長石	Feldspar	长石	長石		—	1
※ 湯花	Flowers of sulphur	硫华；硫磺华	湯花		—	
※ 萤石	Fluor spar	氟石；萤石	萤石	フローライト	—	1
※ 化石	Fossil	化石	化石		石蟹	1
△ 缺口	Fracture	裂痕；断口；断面	（鉱物の）割れ口		破爛	
※ 方鉛鉱	Galena	方鉛矿	方鉛鉱		—	1
※ 石榴石	Garnet	石榴石	石榴石	ガーネット	夜明珠	1
※ 氣燈	Gas lamp	煤气灯；汽灯	ガスランプ		—	
○ 玻璃	Glass	玻璃	硝子	ガラス	玻璃，面鏡，酒杯	
○ 釉	Glaze	釉	釉	うわぐすり	磁釉尖	
○ 金	Gold	金	金	ゴールド	金，黄銀	
※ 測角器	Goniometer	测角器、测角计	測角器		—	1
※ 格郎姆	Gramme	克	グラム		—	
○ 花岗石	Granite	花岗石	花岗石		花崗石	
※ 筆鉛	Graphite	石墨	黒鉛	グラファイト	—	
※ 礫岩	Gravel-rock	砾岩	礫岩，砂利岩		—	1
△ 晶群	Group	晶群	晶群		儕、羣、隊、夥	1
※ 糞化石	Guano	鸟粪石	グアノ		—	
○ 石膏	Gypsum	石膏	石膏		石羔	
※ 硬水	Hard water	硬水	硬水		—	1
※ 赤鉄鉱	Hematite	赤铁矿	赤鉄鉱	ヘマタイト	—	1
※ 弗酸	Hydrofluoric acid	氢氟酸	フッ化水素酸		—	
△ 氷柱	Icicle	冰柱	氷柱	つらら	氷結	1
※ 火成岩	Igneous	火成岩	火成岩		—	1
○ 鉄	Iron	铁	鉄		鉄，黒金	
※ 輝鉄鉱	Iron glance	辉铁矿	輝鉄鉱		—	1
△ 陶土	Kaolin	陶土	陶土		高嶺石	1
※ 熔岩	Lava	熔岩	溶岩	マグマ	—	1
○ 鉛	Lead	铅	鉛		鉛，黒鉛	
※ 褐炭	Lignite	褐煤	褐炭		—	
○ 石灰	Lime	石灰	石灰		石灰，白灰	
※ 石灰岩	Lime stone	石灰岩	石灰岩		—	1
△ 生石灰	Limestone	生石灰	生石灰	酸化カルシウム	粉石	1
※ 褐鉄鉱	Limonite	褐铁矿	褐鉄鉱		—	
※ 器械油	Machine oil	机油	機械油	マシンオイル	Machine 機器	
※ 磁鉄鉱	Magnetite	磁铁矿	磁鉄鉱	マグネタイト	—	1
※ 孔雀石	Malachite	孔雀石	孔雀石		—	1
△ 鍊鉄	Malleable iron	炼铁	可鍛鑄鉄		可槌得薄的鉄	
△ 肥料	Manure	肥料	肥料		糞，尿	1
△ 大理石	Marble	大理石	大理石	マーブル	花石，白石，雲石	1
△ 燐寸	Match	火柴	燐寸（マッチ）		火柴	
△ 雲母	Mica	云母	雲母		千層紙	1
△ 摩他	Mortar	砂浆；灰浆	漆喰	モルタル	坎白，灰泥	
※ 塩酸	Muriatic acid	盐酸	塩酸		—	1

△	揮発油	Naphtha	挥发油	揮発油		石漆, 石脳油	1
※	鎳	Nickel	鎳	ニッケル		—	
△	硝石	Nitre	硝酸鉀; 硝石	硝石		硝, 火硝	1
※	硝酸	Nitric acid	硝酸	硝酸		—	1
※	油井	Oil well	油井	油井		—	1
※	鮫石	Oolite	鮫粒岩	魚卵岩	オーライト	—	
※	蛋白石	Opal	蛋白石	蛋白石	オパール	—	1
○	石蠟	Ozocerite	石蜡	地ろう	オズケライト	—	
△	片幾	Paint	涂料	ペンキ, 塗料		漆, 顔料	
※	紙型	Paper mould	铸模; 字模	紙型	しけい	—	
○	珍珠	Pearl	珍珠	真珠		珍珠	
△	泥炭	Peat	泥煤	泥炭		炭, 草皮柴	
○	石油	Petroleum	石油	石油		—	
△	白蠟	Pewter	白蜡	しろめ	ピューター	錫	
△	磷光	Phosphorescence	磷光; 磷火	磷光		猛火油, 陰火	1
※	唧筒	Piston pump	活塞泵; 柱塞泵	ピストンポンプ		—	
△	石膏粉	Plaster of paris	石膏粉	焼き石膏		Plaster 灰泥, 膏	
○	鉄板	Plate	鉄板	鉄板	プレート		
○	白金	Platinum	铂金	白金	プラチナ	Platina 白金	
○	陶器	Porcelain	陶器	陶器		上磁器	
○	浮石	Pumice	浮岩; 浮石	軽石, 浮石		浮石	
△	黄鉄鉱	Pyrite	黄鉄鉱	黄鉄鉱	パイライト	石青礫石	1
△	石英	Quartz	石英	石英		瑪瑙潔白如雪者	1
※	硅岩	Quartz-rock	石英岩	石英岩		—	
※	水銀	Quick silver	汞; 水銀	水銀		—	1
※	鉄軌	Rail	铁轨	レール		竹鷄	
※	赤銅	Red alloyed	紅色合金銅	赤銅 (しゃくどう)			
※	代赭石	Red ochre	代赭石; 赭色赤鉄鉱	代赭石(たいしゃせき)	レッドオーカー		1
○	水晶	Rock crystal	水晶	水晶	クリスタル	—	
※	岩塩	Rock salt	岩盐	岩塩	塩化ナトリウム	—	1
※	安全燈	Safety lamp	安全灯	安全ランプ		—	
○	食塩	Salt	食盐	食塩		塩, 碱	
※	蛇紋石	Serpentine	蛇纹石	蛇紋石		—	1
※	礬紅	Sesquioxide of iron	明矾	明礬	酸化ニ鉄?	—	
※	菱鉄鉱	Siderite	菱鉄鉱	菱鉄鉱		—	1
○	銀	Silver	銀	銀	シルバー	銀, 白金	
△	硝石灰	Slaked lime	消石灰	消石灰	水酸化カルシウム	以水淋灰	1
※	石筆	Slate pencil	石笔	石筆		—	1
※	石板石	Slate stone	石板石	石板石	スレート石	—	1
※	煙晶	Smoky quartz	茶晶; 烟水晶; 烟晶	煙水晶	スモーキークォー	—	
※	酒精燈	Spirit lamp	酒精灯	アルコールランプ		—	
○	鍾乳石	Stalactite	钟乳石	鍾乳石		鍾乳石	
○	石筍	Stalagmite	石笋	石筍		—	
○	鋼鉄	Steel	钢铁	鉄鋼	スチール	鋼, 鋼鉄	
※	鉛版	Stereo type.	铅版	鉛版		—	1
※	輝安鉱	Stibnite	輝銻礦	輝安鉱	スティブナイト	—	1
※	層状岩	Stratified	层状岩	層状岩, 成層岩		—	1
※	條痕	Streak	条纹; 条痕	鉱脈, 条痕		—	1
※	硫酸	Sulphuric acid	硫酸	硫酸		—	1
※	亜硫酸	Sulphurous acid	亚硫酸	亜硫酸		—	1
○	硫黄	Sulplur	硫磺	硫黄		硫黄	
△	滑石	Talc	滑石粉	滑石		雲母石	
○	錫	Tin	锡	錫		Tin 錫	
○	黄玉	Topaz	黄玉	黄玉	トパーズ	—	
○	試金石	Touch stone.	试金石	試金石		試金石	
※	電気石	Tourmaline	电气石	電気石	トルマリン	—	1
△	ワニス	Varnish	清漆, 上清漆	ワニス, 仮漆		漆, 油漆	

(24)

△	銅青	Verdigris	銅緑；乙酸銅	緑青 (ろくしょう)		銅緑	
※	蛭石	Vermiculite	蛭石；蛭石粉	蛭石	バーミキュライト	—	1
○	朱	Vermilion	朱紅色；朱砂	朱色	バーミリオン	朱粉	
※	鍛鉄	Wrought iron	鍛鉄	錬鉄	ロートアイアン	—	
○	蠟石	Yellow-quartz marble	黄色大理石	ろう石		—	
※	亜鉛	Zaire	鋅	亜鉛		—	
※	閃亜鉛鉱	Zinc blende	閃鋅礦	閃亜鉛鉱		—	
						合計	65

西 師意 (1863-1936) の漢文著作及び訳書リスト

年次	言語	著書名	書誌	備考	
1	1901	中	史眼十章	(日) 西師意撰；李茂堂 (出版者不明, 1901年)	田雁0212
2	1901	中	史眼 (古意新情)	(日) 西師意著；訓練總監部編訳；(南京軍用図書社, 1901年?)	田雁1695
3	1902	中	実学指針一文華之光	(日) 西師意著；訓練總監部訂；(北京華北訳書局刻本, 1902年)	田雁0211
4	1902	中	泰東之休戚	(日) 西師意(金城)著；(北京華北訳書局, 1902年)	実藤文庫0475
5	1902	中	大学義疏一温故知新	(日) 西師意著；訓練總監部訂；(北京華北訳書局, 1902年)	実藤文庫0348
6	1902	中	史眼・実学指針・泰東之休戚	(日) 西師意(金城)著；(北京華北訳書局, 1902年)	実藤文庫0444
7	1904	中	算術教科書 (上下両篇)	(日) 藤沢原著；(日) 西師意訳述；(山西大学堂訳書院, 1904年9月初版)	北京国家図書館
8	??	中	藤沢氏代数学教科書 上下両篇		①
9	1905	中	地文学教科書	(日) 横山又次郎著；(日) 西師意訳述；(山西大学堂訳書院, 1905)	北京国家図書館、慶応
10	1905	中	地文学教科書	(英) 窠楽安著；(日) 西師意訳；(上海協和書局, 1905年) 田雁0860	
11	1905	中	鉱物学教科書	(日) 神保小虎著；(日) 西師意訳述；許家惺校；(山西大学堂訳書院)	①
12	1905	中	物理学教科書	(日) 渡辺光次編；(日) 西師意訳；(山西大学堂訳書院, 1905)	北京国家図書館
13		中	後藤氏物理学教科書		①
14	1905	中	応用教授学	(日) 神保小虎著；(日) 西師意訳；(山西大学堂訳書院, 1905年)	田雁0945
15	1905	中	植物学教科書	(日) 大渡忠太郎著；(日) 西師意訳；(山西大学堂訳書院, 1905年)	北京国家図書館
16		中	丘氏動物学教科書		①
17		中	丘氏生理学教科書	(日) 丘浅治郎著；許家惺、(日) 西師意訳	慶応
18		中	槇山氏各科教授法 正統両篇		①
19		中	菊池氏幾何学教科書 平面立体両部		①
20		中	気象学	(日) 馬場信論著；(日) 西師意訳述	慶応、早稲田
21		中	向井氏製鉄術		①
22	1906	中	農業汎論	(農学叢書；第1編) / 横井時敬著 [他] (東亜公司, 1906)	degidepo
23	1906	中	耕種原論	(農学叢書；第2編) / 沢村真著 [他] (東亜公司, 1906)	degidepo
24	1906	中	栽培通論	(農学叢書；第3編) / 稻垣乙丙著 [他] (東亜公司, 1906)	degidepo
25	1906	中	栽培各論	(農学叢書；第4編) / 佐々木祐太郎著 [他] (東亜公司, 1906)	degidepo
26	1906	中	園芸要論	(農学叢書；第5編) / 池田伴親著 [他] (東亜公司, 1906)	degidepo; 田雁1313 (1908年再版)
27	1906	中	最新算数教科書	宏文学院教授東野十治郎著 / 西師意訳 (東亜公司, 1906年)	慶応、国立教育政策研究所教育図書館
28	1906	中	体操全書	可兒徳著 [他] (東亜公司 [ほか], 1906)	degidepo
29	1906	中	開国五十年史	大隈重信著、上海商務印書館、1929年10月初版 (万有文庫第1集)	①、田雁2791

30	1907	中	最新動物学講義	飯島魁著 [他] (東亜公司 [ほか], 1907)	degidepo
31	1907	中	家畜飼養汎論	(農学叢書; 第6編) / 八嶽儀七郎, 石崎芳吉著 / 西師意訳 (東亜公司, 1907)	degidepo
32	1907	中	家畜飼養各論	(農学叢書; 第7編) / 八嶽儀七郎, 石崎芳吉著 / 西師意訳 (東亜公司, 1907)	degidepo
33	1907	中	最新電気学	理学士萩原拳吉著 / 工学博士五十嵐秀助校訂 / 西師意訳 (東亜公司, 1907)	degidepo
34	1907	中	日本欧美教育制度及方法全書: 学校管理法・教授法・各科性質・各科互交之関繋	小泉又一述 [他] (東亜公司 [ほか], 1907)	degidepo
35	1907	中	代数学教科書	(日) 渡辺光次著; (日) 西師意訳; (上海協和書局, 1907; 太原山西大学堂訳書院, 1907)	田雁1110
36	1907	中	代数学教科書	(英) 窠楽安著; (日) 西師意訳; (上海協和書局, 1907)	田雁1112
37	1909	中	病虫害学	(農学叢書; 第8編) / 農学士外山先生著 / 西師意訳 (東亜公司, 1909年前?)	★
38	1909	中	養蚕論. 上下二冊	(農学叢書; 第9編) / 農学博士佐々木先生著 / 西師意訳 (東亜公司, 1909)	degidepo
39	1909	中	林学要論	(農学叢書; 第11編) / 本多静六著 [他] (東亜公司, 1909)	degidepo
40	1909	中	獣医学	(農学叢書第12編); / 農学士小倉先生著 / 西師意訳 (東亜公司, 1909?)	★
41	1910	中	農業経済論	(農学叢書; 第10編) / 横井時敬著 [他] (東亜公司, 1910)	degidepo
42	1911	中	動物学教科書	(日) 丘浅治郎著; (日) 西師意訳; (上海広学会, 1911年, 122頁)	田雁1461
43	1911	中	鉱物学 (一卷)	(日) 神保小虎; (日) 西師意合著; 許家惺訳 (太原山西大学堂訳書院, 1911年前?)	田雁1557

注

- (1) 年譜は西師意のご令孫である西拓也氏から頂いた資料: ①西師意自筆の履歴書; ②西師意履歴書補遺 (西伊策氏より); ③西伊策氏の手紙、及び筆者の調査に基づいて作成。
- (2) <https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/exhibits/next/index20200128.html> 実践女子大学香雪記念資料館の記事による。
- (3) 西伊策氏が昭和53年 (1978) 10月21日にその姉に差し出した手紙の内容による。以下、西伊策私信と略す。
- (4) 田衛冰『衡水地区桐城学人录』河北教育出版社、2019年11月。pp.273-278を参照。
- (5) 政协大城县委员会编纂『大成人物志』出版社: 政协大城县委员会、2015年12月
- (6) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 日記卷六』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.524-526)
- (7) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 尺牘三』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.2055-2057)
- (8) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 尺牘三』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.2104-2105)
- (9) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 尺牘三』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.2074-2081)
- (10) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 尺牘三』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.2110-2112)
- (11) 呉闔生編『桐城呉先生 (汝綸) 尺牘三』(沈雲龍主編『近代中国史料叢刊第三十七輯』所収、文海出版社、pp.2109-2110)

- (26)
- (15) 汪琬 1998、pp.198-218を参照。
- (16) 英文原文は Timothy Richard, *Forty-five Years in China reminiscences (London 1916)*, available online at <https://archive.org/details/fourtyfiveyears00richuoft/page/n8>による。
- (17) 徐冠華 邢云文「清末高等学堂科学教材编译及传播研究——基于山西大学堂上海译书院的考察」『編輯之友』2019年2月、及び http://www.sohu.com/a/236892439_728245「校史| 訳書院及訳書考」を参照。
- (18) 楊琥編集『国家清史編纂委員会・文献叢刊 夏曾佑集』(上海古籍出版社、2011年12月)の前言及び「夏曾佑年表」を参照。
- (19) 楊琥編集『国家清史編纂委員会・文献叢刊 夏曾佑集』下巻、p.762。
- (20) 郭大松・杜学霞 編訳『登州文会館——中国第一所現代大学』山東人民出版社、2012年10月。p.3, 19, 34, 36, 137を参照。
- (21) 寇振鋒「中国の『東方雑誌』と日本の『太陽』」
- (22) 郭大松・杜学霞 (2012) p.163, 270を参照。
- (23) <http://news.sxu.edu.cn/sdsy/90439.htm> を参照。
- (24) 中国第一歴史档案馆と福建师范大学历史系合編『清季中外使領年表』中華書局、1985年版、p.82及び下記を参照されたい。
『北海雜録』注釈札記 (2011-03-01) <http://blog.sina.com.cn/laojiang77>
- (25) 叶君「福尔摩斯为何姓“福”？不是因为分不清 f 和 h 的福建人、而是因为上海人！」上海美国研究 (ID: SIASWechat) 2019-7-23
- (26) 『南洋公学——交通大学年谱 (1896-1949)』陝西人民出版社、2002年
- (27) 郭延礼著『近代翻译侦探小说述略』
- (28) 陳婷『晚清西方天文学在中国的传播与影響』中国科技大学博士論文、2017年6月
- (29) 酒井順一郎『清国人日本留學生の言語文化接触』、ひつじ書房、2010年3月。p.101
- (30) 『デジタル版 日本人人名大辞典 +Plus』(講談社)による。

参考文献

- 汪向榮著『清国お雇い日本人』(竹内実・浅野純一・中裕史 訳) 朝日新聞社、1991年7月5日
- 沈国威著『近代中日詞彙交流研究——漢字新詞の創製、受容与共享——』中華書局、2010年2月
- 汪琬著『清末中国対日教育視察の研究』汲古書院、1998年12月
- さねとう・けいしゅう著『増補 中国人日本留学史』くろしお出版、1970年10月20日
- 黄福慶著『清末留日學生』中央研究院近代史研究所(台北)、1975年7月
- 陳力衛著『近代知の翻訳と伝播——漢語を媒介に』三省堂、2019年5月31日
- 陳力衛著『東往東来——近代中日之間的語詞概念』社会科学文献出版社、2019年6月第一版
- 王曉秋著『近代中日文化交流史』中華書局(北京)、1992年9月
- 国立中央図書館主編『中国近代人物伝記』中華叢書編纂委員会(台北)、1973年5月
- 鶴飼新一著『朝野新聞の研究』みすず書房、1985年9月
- 田衛冰著『衡水地区桐城学人録』河北教育出版社、2019年11月
- 郭大松・杜学霞 編訳『登州文会館——中国第一所現代大学』山東人民出版社、2012年10月
- 王李金著『中国近代大学創立和发展的路径：从山西大学堂到山西大学(1902-1937)的考察』人民出版社、2007年12月

陳晴著『清末民初新式体育的伝入与嬗変』華中師範大学出版社、2007年8月

陳婷著『晚清西方天文学在中国的伝播与影響』中国科技大学博士論文、2017年6月

潘喜顔「清末（1901－1911年）歴史訳著訳者群体考略」『山東青年』2017年第10期

譚永平「清末中学博物教科書中進化論内容的演変及其社会影響」『課程・教材・教法』、2012年第2期、pp.76-80

朱京偉「中国における日本製植物学用語の受容：20世紀初期の中国資料を中心に」『明海日本語』（明海大学、2002-03）。

酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触』、ひつじ書房、2010年3月。

舒志田「清末における中訳日本書の一考察：西師意の場合」立教大学日本語研究（26）、pp.48-73、2020年3月25日

（じょ しでん 立教大学日本学研究所研究員）